森毅　著

『人生２０年説』

（イーストプレス）

［９１４／Ｍ２７／２］

森毅のエッセイからは「考え方次第で人生は楽しい」と教えてもらった。

高校一年の頃、彼のエッセイをたくさん読んだ。当時、学年で一番だった同級生も森毅が好きで、彼から借りた本が今回の本だったと思う。その頃は、勉強ばかりの日々に飽き飽きして、ラジオ講座でフランス語や中国語を囓っていた。漫画も含めての読書、映画鑑賞、深夜ラジオで高校一年生は過ぎていっていた。振り返っても何も思い出せないほど何も無い生活だった。

そんな適当な生活を過ごしながら、人生の指標になるものを求めていた。このエッセイ集は森毅の人生論集です。

私の周囲にはモデルにしたい大人が居なかったので、私は本を通して尊敬できる大人に出会った。今でもラッキーだったと思う。

森毅曰く、最初の２０年間は熱中できるものがあればいい。という。１９９１年が初版だが、すでにオタクの存在を肯定的にとらえている。

このエッセイには、それぞれのステージで出会いそうな出来事や当時の社会について考えたことが、語り口調で書かれている。数学の問題を鮮やかに解くように、様々なテーマを彼独自の観点から自由に述べている。頭の柔らかい、頭のいい人なんだなぁと思いながら読んでいた。

自分が小さなことで悩み無駄に時間を過ごしているかと気づかせてくれる。寝る前に読んでも、心が和む。私には癒しのエッセイ集です。

W・ハイゼンベルク　著

『部分と全体』（みすず書房）

［４２０／Ｈ４／３］

山本明利・左巻健男　編著

『新しい高校物理の教科書』

（講談社ブルーバックス）

［４２０／Ｙ９／１］

普段、調べ物はしても、「読書」はしないのだが、『部分と全体』について書くことにしたい。

最初に書いておくが、この本は古い本でもあり、（おそらく訳がそれほど良くないので）決して読みやすい本ではない。著者は、「行列力学」と呼ばれている量子力学を作った物理学者であり、最近数式の見直しなどで話題になった不確定性原理の提唱や原子核の研究もある。

読書案内

この本は、著者が大学に入る前、どのように原子について疑問を持ったかに始まり、第二次世界大戦後、素粒子論について取り組むまでの自伝である。ただ、この本はそのほとんどすべてが、友人（といっても、ほとんどが一流の物理学者だが）や他の研究者との対話として書かれているのが特徴である。著者も書いているように数十年前の討論を当時の言葉通りに再現することは不可能だが、「本質的な描写は正確になるように」書いている。

この本では大学での研究の始まり、量子力学の建設と発展、ナチスの台頭（著者はドイツ人）と世界大戦中の研究、戦争末期の抑留生活やアメリカによる原爆投下、戦後の研究まで触れられているが、対話なので、どう考え、討論したかという形式で書かれている。読みにくいが、何かのおりに書かれていたことに触れたくなる本である。

ついでに、もっと気楽に物理を眺めたいなら、私も一部書いている（実は何も新しくないが）『新しい高校物理の教科書』や、『高等学校物理基礎』の教科書もよろしくお願いします。

井上　ひさし　著

『國語元年』（新潮社）

［９１２／Ｉ３／４］

生涯日本語に強い関心を抱き続けた井上ひさしの戯曲です。

明治七年、文部省官僚の南郷清之輔は「全国統一話し言葉」の制定を命じられます。明治維新直後の日本は急速な近代化を目指す中で、氾濫する各地のお国言葉に腐心していました。清之助の家中は、まさにその縮図でした。清之助の長州、舅と妻の薩摩、奉公人達の、岩手遠野、名古屋、京、河内、江戸など様々なお国言葉が飛び交い、彼らは戸惑いながら生活していました。

清之助は文字通り七転八倒で「全国統一話し言葉」の完成に向けて奮闘します。家族、奉公人達の協力がユーモラスな展開の中に描かれ、また話し言葉の性質やその背景にあるものが次々と示されていきます。特に印象的なのは、奉公人達が自らのお国言葉を「全国統一話し言葉」の基盤にと望む一方で、「方言を新しい共通語にうまく変換した者に十銭の褒美」という清之助の提案に、殺到する場面です。彼らは十銭欲しさに自らのお国言葉を切り売りしてしまいます。これは、人間の普遍的な姿なのか。便利さや豊かさを求めて、本当に大切なものを手放してしまう姿勢です。ここで盗人の虎三郎が会津弁で語りかけます。

「いいか、言葉ヅモノワ、人が生ぎでエグ時ニ、無くてはならぬ宝物ダベエ。（略）そんな大事な言葉を、自分一人の考えで勝手に売ッ払ッてかまわないと思って居ンノガ。そんな馬鹿なゴドはあるものではない。」

喜劇から悲劇へ。この物語の

展開には私たちが今考えるべきものが詰まっている気がします。

小坂貴志・小坂洋子　著
『アメリカの小学校教科書で英語を学ぶ』（ベレ出版）
（近日、図書館に入ります）

毎年七月になると、ケント地区からの高校生が数日間本校を訪れ、高校生活を体験するが、本校の二年生が使用している使用している英語の読解のテキストは、米国では、およそ小学校四年生レベルのものであるらしい。プライドが傷つく現実かもしれないが、大半の生徒にとって中学に入って学び始めた言語であるから、むしろ上達が早いとも言えるかもしれない。小学校の英語は、複雑な概念を理解できない児童に向けて書かれているから、論理的で数理的な英語の特性が最も表れている文体となっている。

個人的には、ネイティブ・アメリカンのコスチュームを作ろう（社会）、宇宙を見る（理科）、家系図（国語）や、図形の問題、暗算、複数ステップある問題、式を作る（以上算数）の項目に興味を引かれた。以前に、二年生の生徒と共に、マレーシア、シンガポール、インドネシア、韓国、台湾で用いられている高校英語の教科書を研究したことがあったが、それぞれの国の歴史、日本を含む他国との関係、国家としての将来の展望等、日本のものに比べると政治色が濃いものが多かった。本校においても二年次の課題研究において、改めて調べてみるのも面白いと考えている。関連書籍として「アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書（対訳）」「アメリカの歴史教科書が教える日本の戦争」が本校図書館の蔵書となっている。

北　杜夫　著
『どくとるマンボウ青春記』
（中央公論社）
［９１３／Ｋ３２／７］

著者の北杜夫は昨年十月に亡くなられたばかりである。私は『どくとるマンボウ航海記』や『楡家の人々』などを高校時代に愛読した。好きな作家の一人である。この本は高校三年生だった昭和四三年に上梓された。戦後の学制改革で廃止された旧制高等学校を活写したエッセーとして名高い。昭和二〇年に松本高等学校（信州大学の前身）に入学した北氏は、旧制高校最後の世代となった。敗戦の混乱の中でも、わざとむさ苦しい格好をする「弊衣破帽」や、学生寮で「ストーム」と呼ばれるバカ騒ぎを繰り返す旧制高校の伝統は生きていた。「教師からして変である。」ベルトの代わりに縄をしめて乞食としばしば間違われた数学教師ヒルさんなど、個性あふれる教師たちの姿が、ユーモアたっぷりに描かれている。初版から四十年あまりたった今も、版を重ねて文庫本で手軽に読むことができる所以である。

読書案内

本稿を書くために何十年ぶりかで読んでみると、意外と真面目な自伝であった。戦時中の勤労動員や空襲体験、戦後の食糧難など、敗戦前後の日本がよみがえってくる。昆虫採集に血道をあげ文学には無関心だった少年が、バンカラな旧制高校生活をすごすうちに、文学に目覚めて作家となっていった。これが著者一流の韜晦と諧謔を交えて語られている。読み返してみて、大学生となった若き日の私も本書から影響を受けていたことに気づかされた。

夏目　漱石　著
『夢十夜』（岩波文庫）
［０８１／Ｉ１／７／１１／９］

安藤　隆　ほか　編著
『日本のコピー　ベスト５００』
［６７４／Ａ４／１］

最近、自らも芥川賞作家であり、同賞の選定委員をつとめていた石原慎太郎氏が、委員を辞任した。自らの琴線に触れる作品が少なくなったらしい。そんな折、私自身が必要に迫られて漱石の『夢十夜』を読み返す機会を得た。この作品は「こんな夢を見た」の書き出しで始まる、不思議な夢体験の連作で、その第六夜の内容が、西洋哲学の日本への影響を象徴している、という解説を別の本で読んだからだ。ところが、「もののついで」と思ってほかの夢も読んでみると、なかなか面白い。学生時代に読んだことのある作品なのに、印象が全然違う。読者側の年齢や心境によって、違った解釈ができてしまうのだ。書かれた「夢」が不思議なのではなく、「読むたびに印象が変わる」のが不思議なのだ。この作品が、芥川賞にノミネートされたら受賞するだろうか？　ふと考えた。

もうひとつは楽しい一冊。近年、注目されているロシアの文豪ドストエフスキーのように、大河長編を読み切らせる力量が、作家には必要だが、ＣＭなどのコピーではそうはいかない。笑えるものから、反則ぎりぎりのものまで、ぱらぱらとめくるだけでも、頭の中にＣＭの音楽や街角の看板が思い出される。ただし、この種の本は賞味期限がある。自分の小さい頃の記憶があるうちに、一度見てみよう。